

# 東京バッハ合唱団 月報

[第 644 号] 2016 年 2 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3- 47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No. 644

February 2016

5-17-21-101 Funabashi,  
Setagaya-ku, Tokyo

## 2016 年初頭を生きる視点に、光明

宮田光雄 [著] 『カール・バルト——神の愉快的パルチザン』

[新刊紹介] 大村 恵美子 (主宰者)

バルト生誕 100 年記念の 1986 年に、『世界』(9、10 月号) 誌上に「神の希望の弁証法」と題するバルトの政治的評伝を出された著者は、このたび、バルト没後 50 年を前にして、この新たな評伝(岩波現代全書、2015 年 12 月刊)を発売されました。多年にわたる宮田氏のバルト研究の歩みが、バルト自身の真摯な 82 年の生涯の足どりの描写と離れ難い一体となって、私たちの眼前で、まさに 2016 年初頭のこの世界に生きる視点に、光明を照らしていただいた思いがします。

戦後間もないころ、教会の青年会読書会で、私も、日本語訳が出版されたばかりのバルト『「ローマ書」講解』(以下『ローマ書』)を、みんなで四苦八苦しながら、かじりついて読んだ覚えがあります。だいたい「ボンヘッファー研究会」に入った頃から、ただいかめしいばかりのバルトの印象が、バルト自身の内面的変化も大いに影響して、だんだん取りつきやすいものとなって来ました。この新著では、そのような変遷を、世界状況の移り変わりに従って、わかり易く解説され、大きな流れの中に、しっかりと納得させられた感じがします。

《神の愉快的パルチザン》Gottes fröhlicher Partisan という題名については、著者の説明によれば、〈現代史においては特有の機動性や粘り強さをもったゲリラ＝遊撃兵を指すものだ。バルトは、まさに《神のヒューマニズム》に加担するものとして行動して、しぶとく弾力的な政治批判を生み出してきた〉(p.vii)。[以下、著者＝宮田氏の地の文の引用を〈…〉で括った]

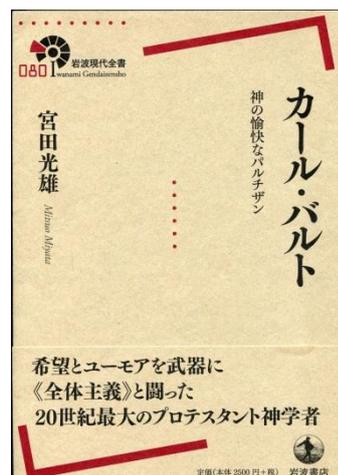
そして、1950 年代末、ドイツの週刊誌『シュピーゲル』のバルト特集号で、バルト自身が提案したのが、この《神の愉快的パルチザン》というタイトルでした。「愉快的」は、バルトが自分自身を笑う自己アイロニーも含めて、彼の好みを表す形容であり、その機動性も大胆さも、すべて圧倒的な神の自由な恵みに負うものです。〈ユーモラスは、すべての自己称賛と自己賛美の正反対である〉と彼は論じる(p.vii)。「はじめに」で、著者は、〈「力強く、落ち着いて、ユーモアをもって」生きる《希望》の意味を学び直してみることは、決して無駄ではない〉(p.ix)と記しています。現在、

黒雲にゆく手の見通しを阻まれるようなこの新年の幕明けに、私たちに、この上なくふさわしい励ましの一冊が贈られて来たのでした。

\*

スイスの片田舎の小村の牧師をしていたカール・バルト(1886 - 1968)は、『ローマ書』草稿を 1918 年(32 歳)に完成し(p.6)、翌年にミュンヘンで出版すると、大きな反響を呼び起こし、第 2 版(1922 年)で、バルトの存在は世界的に有名となり、20 世紀のプロテスタントイデオロギズムを代表する神学的マニフェストと見なされました。(p.8)

そこでは何よりもまず《既存の秩序》にたいして厳しい糾弾が示されます(p.10)。バルトは、〈「秩序の中にひそむ悪、すなわち、秩序が存立するというこの中にひそむ悪」を認識するところに「革命的な人間」が生まれる、という。しかし、この《革命家》は、真の秩序の樹立を意味する《神の革命》を志しながら、「真実には反動である別な革命を行なう」にすぎない〉(p.11)、と述べます。〈「偶像崇拜から解放され」、いっさいのロマン主義が捨て去られるところこそ、「誠実な人間性と世俗性」があらわれ、人間は「即時的になる」〉。〈「対立する双方の主張から絶対的な語調が消えて、比較的穏健な、あるいは比較的過激な照尺で、人間のさまざまな可能性に道が開かれるようになるときに、[はじめて]政治は可能となるのである」〉(p.13)。〈10 年後の危機の精神状況の中で、《秩序》の



ロマン主義と《反革命》のロマン主義とが、ついにナチズムにおいて合流したとき、バルトの神学的洞察のリアリズムが明らかになった。(p.17)

社会民主黨員となっているバルト(1915年以来)が、目標としてあげているのは、1)〈社会的・経済的な弱者のために闘い、…疎外を克服すること〉、2)〈人間が自由に生きる権利を保障するデモクラシー〉、3)〈軍国主義を克服する平和政策〉、4)〈ナショナリズムを克服する諸国民間の友好〉ということでした(p.31)。

1932年末には、すでに主著『教会教義学』の第1巻(第1分冊)が出版されています。これは〈一見したところ教会内部の教理的議論のように見えるかもしれない。しかし、それは、事実上、同時代史の出来事に即した周到な対話から神学の根本問題まで考え抜いた《徹頭徹尾、政治的なテキスト》(Ch・フライ)なのであった〉。(p.34)

バルト自身は、『今日の神学的実存』の公刊直後に、その1部をヒトラーに送りつけました(1933年7月1日付)(p.45)。その中で、彼は帝国宰相ヒトラーに、堂々と否定意見をつきつけています。ヒトラーに追隨する《ドイツ的キリスト者》のメンバーは、教会選挙において75%以上を数え、〈教会堂の中には、ハーケクロイツの旗がひるがえり、ナチ党歌「掲げよ、旗を高く！」がルターの讚美歌「神はわが砦」とともにこだまする勢いとなった〉(p.47)。

1934年5月、〈第1回目の全国的規模での自由な《告白教会会議》が開催され[……]最終的には、教派の立場の違いを超えて、全会一致によって「バルメン宣言」を採択した〉(p.55)。ここでは、〈絶対的服従を求める国家の全能性にたいする要求は打破されざるをえない〉。それは、〈ナチ国家の《全体主義的》要求にたいして教会の自立性を確保することを目差すものであった〉。(p.61, 62)

1935年6月後半の土曜日、バルトはドイツでの大学教授職を解任されましたが、スイスのバーゼル大学から招かれ、翌週の月曜日に教授に就任します。〈「したがって私は日曜日だけ失業者だった」と、彼はユーモラスに語っている〉。〈バーゼルは、バルト自身が生まれ育った郷里〉であり、〈いまやヨーロッパ全体を巻き込む動乱の時代にあって、彼の愛する故国スイスが新しい闘いの根拠地となったのだ。〉(p.84)

その後も、バルトは危険を冒してドイツにわたり(p.85)、講演しては、多数の聴衆の大歓呼を浴び、また多くのエッセー、説教、著作出版を通して、ナチズムにたいする精神的抵抗を基礎づけようとしてきました。(p.87)

〈戦争終結の前後にかけて、ドイツ問題に対するバルトの発言は多くなっていく〉(p.130)。バルトは、〈過ぎ去った戦争がただヒトラーの支配を打ち倒すことを目標としたのであり、ドイツ国民を滅亡させるためではなかったことを明らかにする。[……]勝利と解放が

祝われるいま、ドイツの将来ということこそ連合国側の最大関心事でなければならぬ〉、そして〈ドイツ人は、他者に転嫁しえない自分自身の責任を引き受け、そのことを通じて政治的に成熟すべきである〉と。(p.131)

1945年10月、ドイツの福音主義教会の代表者たちは、世界教会の代表者たちの前で、有名な《シュトゥットガルト罪責告白》を公にします。(p.136)

〈バルトにとって、《罪責》ないしドイツ人全体の《集団罪責》といった概念が重要ではなかった〉。〈「私にとってもっとも重要なのは、[……]すべてのドイツ人が1933年以来生じた出来事にたいして責任をとることです。[……]こうした犯行そのものには、事実上、相対的に少数のドイツ人しか関与していなかったことでしょう。[しかし]そこへ通じていた道程は、彼らすべてのものが、ともに歩んでいったのです。』(D・コッホ編『公開書簡1945-1968』)(p.139, 140)

戦後さっそくボン大学に招かれたバルトには、聴衆が倍増しつづけ、《バルト主義者》もふえ続けました。バルトはそれに対してこう述べます。〈「私は、バルト主義者という人たちが存在しているということを耳にしました。諸君がそんな人に出会ったら、よろしく言っておいて下さい。そして私がけっしてバルト主義者ではないということも伝えておいてくれたまえ。』(p.144)

〈バルトの神学思想は、『教会教義学』を公刊し始めた1930年代を境として、大きな変貌を経験した。[……]すでに『ローマ書』においても神の《否》を貫いて確実に響いていた神の《然り》は、いまや、いっそう力強く打ち出されることになった。[……]神の恵みの事実が神学の中心にすえられた。それは、キリスト者の社会と政治にたいする関わりを、いっそう積極化することを可能にした。〉(p.180)

〈「人間はタベにいたるまで労働や耕作に携わられることを許されている。[……]それだけでなく、詩作し思索すること、音楽を楽しむ飲み食いすること、喜んだり、またしばしば悲しんだり、愛したり、ときには憎んだり、若かったり年老いたりすることも。[……]人間にとって無条件の主である真の神は、神が人間を創造した目的にふさわしくあることを人間にたいして許すのである。』(『創造論』)(p.183)

〈神が人間に語りかけ、人間を契約可能なパートナーとすることによって、はじめて人間は主体となる。[……]人間は、キリストによって解放されることによって、はじめて神と他者とに開かれた責任を負う《成人性》を獲得するのだ。〉(p.184)

〈「天国は開かれ、地獄は閉ざされ、神は正しいとされ、悪魔は反駁され、生命は勝利をおさめ、死は克服され、この約束を信ずる信仰は唯一の可能性であり、この約束にたいする不信仰は排除された可能性である。』(pp.187-188)

晩年のバルトは、神学者エーバーハルト・ブッシュとの対話の中で、この予定説こそ自分の「教義学の頂点」をなすものだ、と断言しています。

〈バルトの予定論は、基本的テーゼとして恣意的な独裁政治に正面から対立する《自由な恵み》の神による万民の救いを示すものだった。〉(p.189)

1958年にバルトが過去10年間の歩みを回顧して次のように記します。〈「以前よりも私はずっと穏和になり、平和を好むようになり、人は結局その反対者と同じ舟に乗っているのだということをもっと容易に認めるようになり、また時には不当な攻撃を受けても自己防御のためにあえて乗り出そうとせず、他人を攻撃するにもそれほど熱心ではないようになった」。そしてこの背後には、助手としてバルトを長年支えた〈キルシュバウムの貢献があったことは確実であろう。〉(p.192)

〈「経済的なグローバリゼーションの下に、現代世界を支配する巨大な権力の《主なき》匿名性と絶望的なほどの世界を被う無力感とが、21世紀に入って、いっそう顕在化しつつある。〉(p.214)

〈バルトは、《主なき諸権力》がその特有の力を展開する現実とダイナミクスとを政治、経済、思想、技術、消費や享楽の日常生活というさまざまな次元に即して批判的に観察し分析していく。〉(p.222) [『教会教義学』遺稿]

〈あらゆる人間的な建設も破壊も《本来的》なものではなくて《暫定的》なものにすぎない[……]。してみれば、「世の出来事の中にあつて、世の出来事のために、さらには世の出来事に対して、恐れを抱くこともありえない」。[……] それゆえにこそ「憎むこともありえない。根本的には、いつもただ愛すること、いつもただ人間のために存在することができるだけである」。〉(p.257。下線部は引用文の傍点部)

〈バルトのあたえる展望は、明らかに21世紀の当面する《新自由主義》によるグローバルな危機を射当てるものだ。匿名の多国籍企業や投機的な金融資本によって生み出された世界各地における《草の根》の民の飢えや貧しさ、資源の乱費や枯渇、自然や環境の破壊など。これらの問題は、現に生きている人間の生存を脅かしているだけではなく、未来の世代から生きるチャンスを奪い、さらには多くの動植物の種の絶滅さえも生み出しているのだ。〉(p.262)

〈主権国家レベルにおける安寧秩序の維持といった《消極的》な平和観を越えて、地球大での自由・正義・権利を実現する《積極的》な平和を追求していかなければならない。軍事力優先の政策によって戦争を《抑止》したり安全を《保障》したりする伝来的な思考——そこでは、戦争を自然史的に不可避な出来事だとする深層意識が働いている——頑なな《迷信》から脱却しなければならない。〉(p.263)

〈神学者および同時代人としてのバルトの生涯を支

えていたのは、この《子どもらしい》素直な神信頼にほかならなかつたと言うことができるだろう。〉[了](p.265)

\*

世界は、平和を維持することが出来ず、戦争を止めることが出来ず、人類は、愚行を中止することが出来ない。それでも、核戦争で全滅するに至らず持ちこたえているし、戦乱を避けられている地域では、寿命が50歳から100歳を超えようとする現象も起きます。バルトの時代は、これよりもひどいことはあるまいと見られる有様だったが、それでも、バルトは、死に近くにつれて未来を明るく信じ、笑いも多くなっていきました。私たちも、そのようなバルトの生涯をここでつぶさに教えられて、どんな過酷な地球の惨状も投げ出さず、しっかりと自分の手も加えて担ってゆこうという勇気が与えられました。

新年早々のすばらしい贈り物に、宮田光雄先生に心から感謝いたします。

〔著者〕宮田光雄

1928年、高知県に生まれる。東北大学名誉教授。ヨーロッパ思想史専攻。『非武装国民抵抗の思想』『キリスト教と笑い』『ナチ・ドイツと言語』(以上、岩波新書)、『聖書の信仰』全7巻、『国家と宗教』『ホロコースト(以降)を生きる』(以上、岩波書店)、『宮田光雄思想史論集』全8巻(創文社、刊行中)、『バルメン宣言の政治学』『ボンヘッファーとその時代』『十字架とハーケンクロイツ』『権威と服従』(以上、新教出版社)など。

## 新年のお便り、お年賀状より

### 南相馬への募金に感謝

藤澤 正孝 様 (そうま地方合唱を楽しむ会 団長)

2016年の元旦に、この手紙をしたためております。皆さまも、お元気で新しい年の各種演奏会に向けてスタートを切られることと思われま。

さて、昨年暮れに、また、荻窪教会でのクリスマス・コンサート[12/26]での募金をお送りくださり、こんなにまで真心をくださる東京バツハ合唱団の皆さまに、心の底からの感謝の念を禁じ得ないものであります。

前回[9/26、報告コンサート]にご送金いただきました募金の5万円につきましては、当地での公演前夜祭[8/21、南相馬市民文化会館多目的ホール]で集まった会費の残金7000円を添えて、南相馬市に復興義援金として、市長応接室にて市長に手渡しいたしました。

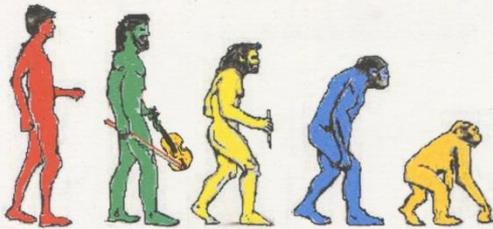
今回ご送付いただきました募金の貴重な3万円につきましては、毎年9月の第1日曜日に実施しております「そうま地方合唱を楽しむ会」の合同発表会の準備金として、有り難く使用させていただきたいと考えます。まことに有り難いこととあります。

相馬地方の6地区11団体の、合唱を生き甲斐とする方々が、震災や原発事故にめげず生きてゆくための合同発表会に対する、恵美子先生を中心とした東京バッハ合唱団の皆さまからの、思いがけない支援と言う深い愛に、元気をいただき、私たちは楽しく、また頑張って歌っていくつもりです。

昨年8月の、ここ南相馬の地での東京バッハ合唱団との共演の感動が、昨日のこのように思い出されますが、団員の皆さまの今年も健康でご多幸でありますよう、心より祈っております。

皆さまのバッハへの造詣がなお一層に深まることを念じ、尊敬と感謝の気持ちを添えて、お礼の手紙を送らせていただきます。

## あけましておめでとうございます



ヒトの「シンカ」が問われるサル年……。今年もよろしくお願いします。

**2016年 元旦**

大野 博人・朗子 様 (団友)

柳元 宏史 様 (団友、山口市)

毎回、月報楽しみに読み、東京の空気を吸い込んでいます。エマニュエル・トッドの本、私も読んでみました。視点について考えさせられました。

大切 幸一 様 (後援会員、京都府木津川市)

賀春 歴史は繰り返されると言いますが、時の首相の裁量でいくらかでも変更可能な法律が昨年成立し、日本の国が再び戦時を繰り返すのではと危惧しております。末永く平和な国でありますように……。

田口 博子 様 (団員)

先生の姿勢に、いつも刺激されています。団の皆様と、心の声を合わせることの楽しさに、心をひかれております。

田尻 玲子 様 (団員)

昨年合唱団に入れていただいてから、毎日の生活に輝きが増しました。本年もよろしくお願いいたします。

村山 英司 様 (団員)

下を向いて、手の中の小さな画面に見入っている人ばかりですが、自分の感性や経験知あるいは想像力を基に、自分のペースで暮らしたいと思います。本年もよろしくお願いいたします。

### — 次回公演ご案内 —

| 第113回定期演奏会 |

2016年5月28日(土)、午後2時開演  
府中の森芸術劇場ウィーンホール

- ・カンタータ第148番《み名の栄光を讃えよ》
- ・カンタータ第40番《地に來ませり 神のみ子》
- ・カンタータ第16番《主ほめ歌わん》
- ・カンタータ第192番《ああ感謝せん 神に》

[アルト] 佐々木まり子

[テノール] 鏡 貴之

[バス] 山本悠尋

[オーケストラ] 東京カンタータ室内管弦楽団

[オルガン] 草間美也子

[指揮/オーボエ] 辻 功 (BWV16)

[指揮・訳詞] 大村恵美子 (BWV148、40、192)

チケット：前売り 3500円 (全席自由 500席)

お申込み/お問合せ：東京バッハ合唱団事務局

(下記のいずれかでお申し込みください。振替用紙同封にて、チケットをご郵送いたします。後日、お近くの郵便局よりお振込みください)

電話：03-3290-5731 FAX：03-3290-5732

メール：office@bachchor-tokyo.jp

HPお問合せ窓口：http://bachchor-tokyo.jp/

### <訂正・おわび>

月報1月号と同封でお渡しした「北イタリア小紀行 2015年12月5日～11日」(大村恵美子)の中で、次の3か所に誤りがありましたので、おわびして訂正します。

○ヴェネツィア、p.2右段5行目：「そこからアルノー川沿いにリアルト橋まで」→「大運河(カナル・グランデ)」に訂正。

○サンマリノ、p.3右段29行目：「あの時訪れたローテングブルクの」→「ローテンプルク」に訂正。

○ヴァチカン、p.4右段6行目：「慈しみの聖年」(Ubi laeum) → 「Iubilaeum」に訂正。

なお、一部お渡しできなかったため、ご要望の方がいらっしゃいましたら、お知らせください。お送りします。